



4 救助活動状況

先着の小平消防隊より情報を聴取した。傷病者は計4名。大型バスの乗客2名と乗用車運転手及び乗用車助手席の各1名が負傷。大型バスの傷病者2名については、バス運転席側後部の非常口へ梯子を架梯し救出中(写真5)であり、乗用車運転手は自力で脱出し、小平救急車へ収容済みとのこと。乗用車助手席の負傷者は腰部痛により体動困難、かつ助手席側ドアは変形により開放困難のため、スプレッダーを用いてドアの開放を実施した。

【開放手順】

- 1 ホリガンツールによりラッチ部分にスプレッダーを差し込むための隙間を作る。(写真6)
- 2 隙間にスプレッダーを差し込み拡張。
- 3 ドアとピラー部分の全体に隙間ができたため、①・②・③・④の順で拡張し、ラッチを破壊する。(写真7)
- 4 ドア開放。
- 5 下肢は挟まれていなかったためそのまま救出となる。(写真8)



写真5 バス運転席側後部の非常口へ梯子を架梯し救出中。



写真6 ラッチ部分にスプレッダーを差し込むための隙間を作る。



写真7 開放手順①～④



写真8



乗用車に使用した救助資機材
上／ホリガンツール、車輪止め
下／スプレッダー



助手席の負傷者の状態。腰部痛を訴えていた。

6 おわりに

本事例は特異事例ではなく、基本的な救助活動により救出することができた事例である。だが筆者にとっては救助隊としての初出勤事例であり、反省点や疑問点など多くのことを学んだ事例であった。今後救助隊員として活動していく中で、本事例での経験を活かし訓練に励んでいきたい。

5 救急活動状況

大型バスの傷病者2名は窓へ架梯したはしごにより救出、歩行可能、頸椎捻挫及び臀部打撲で、留萌救急隊が救急車内へと収容し留萌市立病院へ搬送。乗用車運転手は歩行可能、頭部切創・腰部・下肢打撲で小平救急隊が車内へと収容した。

乗用車助手席の傷病者(69歳 女性)は意識清明、呼吸:正常、脈拍:78回/分、血圧:180/84mmHg、Spo2:100%(酸素5L投与)、主訴:嘔気及び腰部痛。小平救急隊により、ネックカラー装着、毛布による保温、酸素5L投与済みであった。救出時、バックボードによる全脊柱固定を実施。小平救急隊が車内収容して全身観察を行った結果、骨盤部の痛みを主訴とするものの、ショック症状等はない、容態変化なく留萌市立病院へ収容した。病院での診断は骨盤骨折であった。

執筆者紹介

留萌消防組合留萌消防署
予防課予防係主任
千種将志
年齢:27歳
消防士拝命:平成20年4月1日
趣味:ロードバイク、登山



実録! 救助事例

連載

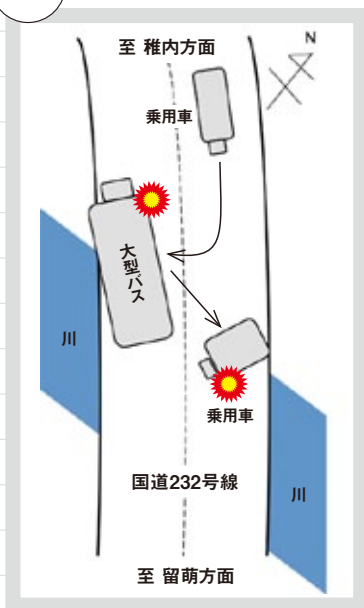
シリーズ第2回目は「普通乗用車と大型バスの正面衝突事故」である。
この事例は筆者が救助隊員として初出勤したものである。

第②回 普通乗用車と大型バスの正面衝突事故

図1 現場の場所



図2 現場見取り図



1 発生日時及び発生場所

平成26年1月某日夕方、小平(おびら)町の国道232号線で事故発生。現場は留萌消防署より約13km離れていた。国道232号線は北海道の日本海側北部の稚内と留萌を結ぶ国道で、事故発生現場は道路補修工事のために横に一時的な道路が作られ緩やかなカーブとなっていた。事故当時の気温は-3℃で路面状況はアイスバーン状態であった。

写真2 現着時の様子。大型バスと乗用車が道路を塞いでいる。
写真3 バスは搭乗口側がガードレールに衝突し開放不可。
写真4 乗用車は助手席側が大破。

2 通報内容・発生機序・出動車両

事故当事者のバス運転手が110番通報し、警察署から消防署へ入電。

「国道232号線でバスと乗用車の交通事故が発生しており、バスの乗客女性が首の痛みを訴えているそうです」

さらにその後、現場を走行していた通行車より、「乗用車の1名が車内でぐったりしている」との119番通報を受信。稚内方面から走行していた普通乗用車がスリップして走行車線を越え、反対車線を走行中の大型バスと正面衝突したものである。

留萌消防署から指揮隊1隊、救助隊1隊、救急隊1隊が出動、同組合の小平消防署より消防隊1隊、救急隊1隊が出動した。

3 現場到着時の状況

現場約1キロ手前より渋滞しており、消防車両は対向車線を走行して事故現場へと到着。現着時、事故を起こした大型バスと乗用車は道路を塞ぎ(写真2)、大型バスは搭乗口側がガードレールに衝突し開放不可(写真3)であった。乗用車については助手席側が大破し(写真4)、助手席に女性1名が閉じ込められている状態であり、小平消防隊により警戒筒先準備済み。乗用車からの漏油等は確認できなかった。



写真2



写真3



写真4